（様式４）

令 和 7 年 度　学 校 総 合 評 価

６　今年度の重点課題に対する総合評価

本校はスクール・ポリシーに基づき、生徒が主体的に学習を進め、自らの進路を切り拓く力を育むとともに、学校行事や部活動を通じて豊かな人間性を養うことを教育目標としている。今年度はこの目標を達成するため、５分野 11 項目の具体的な重点課題を設定し、さまざまな教育活動を行ってきた。また、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）第Ⅲ期２年目にあたる本年は、今期のキーワードとして掲げた「連携・融合・発信」を具現化する活動を一層推進した１年となった。

学力向上においては、今年度より土曜日の定期考査を取りやめたことを機に、生徒がより主体的・自律的に学習に取り組むよう指導することを課題とした。生徒の学習意欲を喚起するため、教科横断型授業などの授業改善を行い、互見授業を通じてその方法を共有した。さらに、手帳や学習計画表の活用、テスト後の解説授業により、学習のＰＤＣＡサイクルを意識させ、自らの学びを管理する力の育成に注力した結果、考査期間中の学習時間調査では、概ね目標に準じた結果を得ることができた。

進路指導については、進路講演会や大学探訪、アメリカ研修といった行事を継続して実施した。これらの行事は生徒の進路意識の高揚に寄与しており、高い満足度を維持している。昨今の社会情勢を背景に大学入試における安全志向が強まる中、難関大学への出願率は目標に届かなかったが、今後も希望と納得の両立を図る丁寧な進路指導を継続することが求められる。

読書指導においては、前年度から継続している県立図書館との連携強化や蔵書検索システム「カーリル」の運用が功を奏し、レファレンスの利用者数は目標を達成した。

特別活動においては、学校行事や部活動の充実を課題とした。アンケートの結果によるとどちらも生徒の充足感・満足感は極めて高かった。主体的に、かつ、自他の調整を図りながら集団として活動する経験から学ぶことは多く、今後も本校が堅持すべき教育の柱であると考える。

探究活動においては、前年度までの取り組みを継承しつつ、とくに普通科課題研究の洗練を図った。１年次に「読み解く力」を育成するとともに探究の手法やデータ分析、生成ＡＩの利活用に関する指導など、課題研究の基礎を指導することで、２年次への円滑な接続が可能となった。今年度新たに設けた「Ｔ（探究）の時間」では、学年を跨いだ授業展開により、上級生から下級生への活動の継承が実現し、生徒からも好評を博した。外部連携についても、教員の関わり方や生徒の活動の仕方について、ノウハウを蓄積することができた。これらは活動の質を維持しつつ、教職員の業務負担を軽減することにつながると考えられる。

総じて今年度は、本校の教育における根幹を堅持しつつ、生徒の実態や社会の趨勢をふまえたマイナーチェンジを積み重ね、着実な成果を上げた１年であった。

７　次年度へ向けての課題と方策

社会の変化や価値観の多様化、生徒の気質や保護者ニーズの変容、教員の働き方改革、ＩＣＴの進化など、学校を取り巻く環境は大きな転換期にあり、伝統校である本校も教育活動の見直しを迫られている。

教育活動の根幹は日々の授業である。基礎・基本を定着させる既存の仕組みを維持・継承しつつ、生徒がより主体的に参加し、学びのモチベーションを高めることができるような授業を工夫するとともに、互見授業を通して、個々の実践を共有の財産として蓄積していきたい。

今年度の１年生から保護者負担による一人一台タブレット（ｉＰａｄ）の導入が始まった。次年度は進路指導システムの更新も予定されている。こうしたＩＣＴ環境の変化を業務改善に活かしていくための工夫が求められる。

業務の効率化と重点化を進め、教職員がゆとりを持って生徒と向き合える環境を整えることが、結果として生徒に還元され、教育の質を高めるものと考える。生徒と教職員が共に活気ある学校生活を送れるよう、学校評価システムによる検証と改善を通し、今後も充実した教育活動を展開していきたい。